

| | |
|---|--|
| <p>上演8</p> <p>2025年7月27日(日)3校目 四国ブロック(徳島)</p> <p>徳島県立城東高等学校</p> <p>「ポーチとピロティ、ストックヤード」</p> | <p>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第71回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員 島根県立松江北高等学校 金田 瑞希</p> |
|---|--|

高校のゴミ捨て場になっているストックヤードの中には、瓦礫だらけのボロボロの町がある。メイコや魔法学生、演劇部員、戦国時代の人々、天文部……様々な人物たちが自分たちのしたいことをしている最中、文化祭のシフトを抜けたメイコを探して女子高校生たちがストックヤードの中に入ってくる。そこで、人々は彼女たちを敵とみなし、退けようとするも、一度入ったストックヤードからは誰も出ることができない。そんな混沌とした中で、登場人物たちは次々とゴミが回収されるかのように舞台から消えていく。

元々ストックヤードの中にいた人達と後から入ってきた女子高校生は面識があるようだが、会話が噛み合わない。この不可思議な光景が果たして現実なのか、それとも非現実なのか。無数のゴミ袋、リアルな質感の瓦礫、バラバラの時代設定の登場人物たち―現実の境界が曖昧なまま物語は続いていく。その情報量に終始圧倒され、時に恐怖や心のざらつきを覚えた。

一番衝撃的だったのは最後のシーンだ。一斉に始まる機械的な動き、ゴミ収集車を連想させる警告音、止まらない煙、点滅するライト。何か大変なことが起こっていることが本能的にわかる。リコは煙の中に消えていく人を止めようとするが、メイコはただその光景を見ているだけだった。

講評活動の中で、捉え方の一つとして、演劇そのものと通じるものがあるという意見が出た。人の死さえもコンテンツとして消費してしまうこと、セットや登場人物を使い捨てするということの残酷さや無責任さ。それは、上演が終われば、すぐに「次」へ目を向け、今まで向き合ってきた作品を簡単に切り捨ててしまうことと重なった。また、ストックヤードの中は、メイコによるフィクションの世界で登場人物は全員存在しないのではないかと、という意見も出た。虚構だが平和で安全な世界に逃げても、外からはそれを嘲笑され、最後には世界のものが消えてしまうと言った皮肉が込められているのではないかと。講評委員の中には演劇というフィクションを外から揶揄された過去とつながる人もいた。

時間が時々止まり続けたのは何故なのか。何故最後にリコに似た人物はメイコを眺めるだけだったのか。討論をしてみても疑問は尽きない。演劇が終わったらその舞台は、人物はどこへいくのだろうか。全ての観客、特に身近に演劇のある者に、苦しく生々しい衝撃と、終わらない疑問を与える作品だった。

